

『丹後・但馬・因幡海岸地方の自然科学的考察』中 筆者に關係ある部分の解説並に増訂

荒 木 英 一

西日本海国立公園促進委員会に於て『丹後・但馬・因幡海岸地方の自然科学的考察』(1950)を編纂の砌、当時京都府庁に勤務されていた小林茂氏が来宅され、植物資料の提供を求められた。乃で筆者は丹後地域の植物に関し、編纂の趣旨を考へ、新に記述して提供した。又別に同書の集録者山本茂信氏が『野外博物』を所望して来られたので残本あるものを贈呈した。同書中第 112—128 頁は上記資料に依つて集録されたものである。出版された同書を見る時、資料提供者として遺憾の点が頗る多い。次に筆者に關係ある部分を解説し、併せて多少増訂して置き度い。

(一) 「三丹地方現世植物区系」(p. 112) は集録者が『野外博物』から転載されたもので、その内容は同書の趣旨に合はぬ所が多い。その上実にひどい誤植で全く手の着けようがない。著者自身にさへ意味の取り難い所が出来ている。読者がこんなものを筆者の著作として見られることを思う時、誠に残念である。

(二) 「丹後但馬地方の植物」(p. 120) なる小題目は小林氏の求めに応じて筆者の提供した資料を一括し、集録者に於て設けられたものである。所が筆者は候補地中丹後地域に限定して資料を提供したので小題目は「丹後地方の植物」として慇しかつた。同様に「丹後但馬沿海地の植物景観」(p. 120) なる見出しの「但馬」の文字も筆者は用いなかつたと思う。所でその文中「沿海地帯の海浜植物」を読んでいると丹後但馬両地の植物を区別せずに記述していることを発見する。これは筆者の誤りである。又當時は「観光」を主とした為に學術的には不十分の点が多い。こんな理であるから、本項以下に就き、但馬地方に関する事項を追補して小題目中の「但馬」の文字を積極的に生かすと共に丹後地方に関しても多少増訂して置き度い。

(1) 全体として誤植稍多く、言語・文字の改悪がある。併し、意味の通じるものは訂正しない。筆者は歴史的仮名遣を採用し、科名等も所信に拠つて使用したが、不徹底に改変され、一貫しないものが目に着き、誠に見苦しくなっている。例へばセリ科・クチビルバナ科等の科名は筆者は用いなかつた。又第 121 頁最下行のヒシはシヒ、124 頁 23 行目のユリノキはユクノキ、同 33 行目のウルシはウルシ(元栽培)、同じくリウキウハゼノキはリウキウハゼ、126 頁下から 10 行

目のミゾオホバコはミゾオホバコ、127 頁 12 行目のヤマナルコユリはミヤマナルコユリ、128 頁 14 行目の Physais は Physaliastrum、128 頁下から 10 行目のヒロハノオホタマツクリスゲはヒロハノオホタマツリスゲ、同 3 行目の Vii は Uii と訂正して読んで頂き度い。

(2) その後の研究に依り、第 120 頁下から 5 行目のキスゲはハマキスゲに、122 頁 15 行目及 125 頁 6 行目のミヤマクマヤナギはホナガクマヤナギに、122 頁 21 行目及 123 頁 1 行目のシロヤマシダはオニヒカゲワラビに、124 頁 15 行目のシモツケはヒロハシモツケ及ミヤマシモツケに、又 17 行目のツシマナナカマドはナナカマドに訂正する必要が生じた。

(3) 丹後・但馬の「沿海地帯の山野植物」(p. 121) の所で、北方に本居を有し、海辺又は沿海地によつて南進分布して来たものとしてオホカサスゲ・トリアシシヨウマ・セリモドキを追加し、又南方に本居を有し、同様に北進分布して来たものとしてクロマツ・ヤマモモ・モチノキ・シロダモ・センダン・モクゲンジ・イヌビハを追加する。

(4) 丹後・但馬の「沿海地帯の海浜植物」(p. 121) としてハマタカノツメ・タイトゴメ・ハマキスゲ・セツツイボタ・アツバイボタ・ハマボツス・ハマスゲ・オニシバを追加する。又顯著な南進要素としてシロロモギ・ホソバノハマアカザを、同じく北進要素としてタイトゴメ・ハマウド・ビロウドテンツキ・キシウスゲ・ハマゴウを加える。尙ハマキスゲ・アツバイボタは現在丹後・但馬以外には知られていない。

(5) 第 121 頁の 23 行目に「(4) 沿海地帯に於ける山地植物の低下」なる一項を新に設ける。即ち、丹後・但馬の沿海地には山地生のヤマブキシヨウマ・シユロサウ・サンインカンアヒ・カシハ・ホツツジ・アヅキナシ・ナナカマド等が海岸まで降下して生じているのが見られ、珍しく観ずる。これは海岸が沈降した為に元の山地に生じていたものが自然に低地に生ずる形になつたものならんか。これ等植物は総べて三丹地方内陸の山地にも生じている。所がミヤマアブラソスキ・トリアシシヨウマ・セリモドキ・ハナゼキシヤウ等の山地植物は三丹地方の内陸には産しないのに丹後・但馬では海岸附近の丘陵地に生じている。これは北方植

物が沿海地に拠り南進して来たもので上記低下植物とは一応別途のものとして取扱ひ度い。

(6) 大江山麓の「内宮原始常緑樹林」(p. 121)の注意すべき植物にはカゴノキ・ムクロジ・ホホノキ・フヂキ・ユクノキ・ユヅリハ・コセウノキ・シシンラン・ハダカホボヅキ・ハヒホラゴケ・オホタウゲシバ等を追加して考え度い。

この内宮自然林はシビ・カシの類を主木とする暖帯林であるから上記の如く暖地性植物の数々を遺存しているが、同時にイタヤカヘデ・イヌブナ・ハリギリ・ツルミヤマシキミ・ミヤマイラクサ・コタニワタリ等の温帯性植物をも有することは注意を要する。

(7) 大江山上の「稲荷原始落葉樹林」(p. 122)の注意すべき植物にテツカヘデ・オホアカネ・ポタンネコノメサウ・チシマネコノメ・ホソバタウゲシバ等を加え度い。又千丈ヶ嶽を尾根の方え少しく降つた所、即ち稲荷林の縁部と見るべき所にはヒメモチ・ツルミヤマシキミ・ミヤマシグレ・オクモミヅハグマ・シノブカグマ等があつて注意を引く。尙クロタキカヅラがこのブナ林まで登つていることは珍しい。

(8) 「大江山の植物目録」(p. 122)は和名だけのものであるが、多年探究の成果であり、見かけよりは能くまとまつてると自負している。主なるものは凡て標品を作り、極く有りふれたものは野帳に加えてある。併し、確認しないものは一切載せていないから、却つて平凡な種類に落ちてゐるものがあるかも知れない。猶所蔵標品を調査すれば多少増訂すべきものも出て来るであろうが、茲にはコゴメメギ・ユヅリハ(内宮)・スミレ・マルバアラダモ・サイコクイボタ・コバノイボタ(尾根)・コバノエゾイボタ・カハミドリ・シシンラン(内宮・竹内敬氏に依る)・クルマムグラ・ミヤマカンスグを増補して置く。

(9) 丹後但馬地域に於ける「分布上顕著な植物」(p. 127)として次のものを増補する。一般に日本海岸に沿つて但馬・丹後まで北進して来た暖地性植物は更に若狭・越前まで進むものが多く、中には当地方を跳越えて若狭・越前に進むものさもある。

タイトゴメ (*Sedum oryzifolium* Makino) 本州関東以南・四国・九州の海岸に生じ、日本海岸では羽前まで北進しているが、但馬・丹後にも見られる。

リウキウハゼ (*Rhus succedanea* L.) 本州関東以南・四国・九州・琉球・台湾・支那・マレーシア・印度に分布する。丹後：加佐郡、大江山附近には栽植された跡跡があるが、但馬・丹後の沿海地には小木ながら自生がある。これは南方から北進分布して来たもので逸出ではないと思われ、北は越前に及んでいる。発育は十分でないが、これは分布の北限に近いからであ

らう。

ハマビシ (*Tribulus terrestris* L.) 本州関東及若狭以南・四国・九州の海岸に生じ、世界の熱帯地方に広く分布している。筆者は1932年10月16日若狭：大飯郡高浜村附近の海岸砂地に発見して珍しく思つたが、その後但馬：城崎郡香住町の海岸でも採集した。

センダン (*Melia Azedarach* L. var. *japonica* Makino) 本種は四国・九州に自生し、且つ日本に広く栽植されていると言われるが、亦丹後・但馬の沿海地にも稍普通に自生し、小木ながら能く開花している。そして北は越前に及んでいる。

ヒメユヅリハ (*Daphniphyllum Teijsmanni* Zoll.) 本州中南部・四国・九州・琉球・台湾に分布する。但馬・丹後の沿海地にも広く自生し、北は越前に及んでいる。

ムクロジ (*Sapindus Mukorossi* Gaertn.) 本州中南部・四国・九州・琉球・台湾・支那に分布する。三丹には残存せる大木を所々に見かけるが、丹後：加佐郡河守上村の内宮並に外宮の森に存するものは著しい。

モクゲンジ (*Koelreuteria paniculata* Laxm.) 本州日本海岸の越前・若狭・但馬・周防の沿海地に産し、朝鮮・支那に分布する。又通常寺院に栽植されている。但馬：城崎郡香住町の海岸に産することは早く山鳥吉五郎氏に依つて注意され(兵庫県博物学会誌第5号第5頁)筆者も同地を訪ねて実見したが、入江の崖に生じ、小木ながら能く開花結実していた。この日本海岸に産するものは、その産状と分布から考えて逸出ではなく天生ならんと思われる。恐らく植物地理学上満鮮要素の一であろう。

モクコク (*Ternstroemia gymnanthera* Sprague) 本州中部以南・四国・九州の近海地方に生じ、琉球・台湾・朝鮮南部・支那・印度に分布する。日本海岸では丹後に及び与謝郡伊根村の青島には大木がある。

ホウライカヅラ (*Gardneria nutans* Sieb. et Zucc.) 本州関東以南・四国・九州・琉球に分布する。日本海岸では丹後の沿海地に稀産し、北は若狭に及んでいる。

ガンバイヒルガホ (*Ipomoea Pescaprae* Sweet) 四国・九州の南部・琉球・台湾の海岸に生じ、本州の海岸には往々種子が漂着して発芽し、幼植物を生ずるけれども十分には成長しない。本種は広く熱帯・亜熱帯並に暖帯地方の海岸に分布している。本州の漂着地は太平洋岸では相模まで、日本海岸では羽後まで知られている(植物分類地理第4巻第193頁；植物研究雑誌第26巻第282頁；同第27巻第336頁)。越後寺泊の海岸に生育することは既に中村正雄氏に依つて1907年8

月に発見せられ(牧野植物学全集第6巻第99頁)、又羽前・能登・加賀にも知られている。但馬:城崎郡竹野村の海浜に生育することは、最初田口美智太郎氏に依つて発見され、筆者が1935年8月28日同地を訪れて実見した時にも、数株発生していたが茎も短く花は咲いていなかった。

シシラン (*Lysionotus pauciflorus* Maxim.) 本州伊豆以南に点在し、四国・九州・琉球(奄美大島)に分布する。丹後:加佐郡河守上村の内宮自然林に産することは最初竹内敏氏に依つて発見されたもので分布上珍しく、又同地の植生を伺う資料となる。

ビハ (*Eriobotrya japonica* Lindl.) 本州中南部・四国・九州に産し、各地に栽植せられ、支那に分布する。丹後の沿海地に稀産し、北は若狭に及んでいる。

ヒトモトススキ (*Cladium chinense* Nees) 本州相模及能登以南・四国・九州に産し、琉球・台湾・朝鮮南部・支那・印度・マレーシア・濠洲に分布する。そして丹後の海岸地方に生ずる。

スキセン (*Narcissus tazetta* L. var. *chinensis* Roem.) 支那に天生する。日本では本州関東以南の暖地海岸に生じ、或は天生品ではないだろうと云われている。又普通に庭園に栽培されている。但馬・丹後の海岸附近に生じ、晩秋11月頃より抽葶を始める。その産状は鱗茎のみで繁殖するスキセンとしては逸出也と云い切れないものがある。

エゾオホバコ (*Plantago camtschatica* Cham.) オホク沿岸地方・樺太・千島・北海道並に本州・九州の主として日本海岸に生じ、又朝鮮に産する。但馬:城崎郡竹野村の海浜に僅かに見られる。

ミヤマアブラススキ (*Spodiopogon depauperatus* Hack.) 本州中北部の日本海倚りの山地に生ずる。沿海地に抛り南進して来たものが丹後の海浜丘陵地に見

られる。

キンギンボク (*Lonicera Morrowii* A. Gray) 北海道・本州・四国に分布する。三丹地方では丹後・但馬の沿海地に生じ、日本海岸に沿つて南進分布する一要素を成している。

(以上各植物の分布は大井次三郎氏著『日本植物誌』に負う所が多い。)

(10) 「本区域内で発見された新植物」(p. 128)に次のものを追加する。

アツバイボタ (*Ligustrum obtusifolium* Sieb. et Zucc. var. *leiocalyx* Hara form. *crassifolium* Araki, ined.) 丹後:加佐郡西大浦村が原産地。セツツイボタの葉が頗る厚く、硬革質となつた一品で、丹後・但馬の沿海地に産する。

コバノエゾイボタ (*Ligustrum Tschonokii* Decne. var. *parvifolium* Araki, ined.) 丹後:加佐郡、大江山が原産地。エゾイボタに比し、葉面が遙かに小さいから容易に区別出来る。

ハマキスゲ (*Hemerocallis maritima* Araki, ined.) 丹後:熊野郡湊村が原産地。丹後・但馬の海浜に特産する。海浜砂丘又は林下に生じ、時に丘陵地に見ることもある。アサマキスゲに比し、葉幅が頗る広く、花の開度が弱く、花筒が著しく長く、沿海地生であるから区別容易である。

サンインカンアフヒ (*Asarum saninense* Araki, ined.) 丹後:熊野郡久美浜町が原産地。北陸西部から山陰東部にかけて日本海倚りの山地に生じ、又丘陵にも産する。従来一般にアツミカンアフヒ (*Asarum rigescens* F. Maekawa) と同定されていたものである。カンアフヒの裏日本型と考えられる。

(1954年11月24日脱稿)